

小学校国語教材「きつねのおきやくさま」の主題についての考察

A Consideration of the Main Theme of “Kitsune no Okyakusama” a Japanese Reading Material for Elementary School Students

宮川 久美

MIYAGAWA Hisami

この作品は、教育出版と三省堂、二社の国語教科書に採用され、いずれも、孤独でずるがしこいきつねが、純粹無垢なひよこたちに出会い、やさしい、親切、神様みたいと信じられることによってそのように変容していく話だとし、教材としての扱いは、「どんな悪い子もその子信じてあげればいい子になる」というメッセージを発するものとされてきた。三省堂の教師用指導書には、関わる相手の言葉によって、行動がよい方向へ変化していく様子は、ふだんの生活につなげたいところでもあるなどともされている。

たしかに、無邪気なひよこの信じるように変容していき、ついには自らの命を捨ててひよこたちの盾となったきつねの死は本当に悼むべきであると思われる。しかし、作者の思いはむしろ、きつねをそのようにさせたひよこの無邪気な罪深さにあると思われる。飢えたきつねが無邪気なひよこのことばに「ぼうっと」なってついには神様のように、生きたいという我欲を捨て、ひよこたちの盾となって死んでいった、そのようにさせたひよこに、自らを重ねて心痛まずにはおられない、そのような作者の気持ちがこの作品の主題なのではないかと思われる。

キーワード：小学校、国語教科書、きつね、ひよこ、あまんきみこ

Key Words : Primary school, Japanese Textbook, Kitsune, Hiyoko, Aman Kimiko

1. はじめに

『きつねのおきやくさま』¹⁾は1992年(平成4年)に教育出版の『新版国語2年上』に初めて教材として掲載された²⁾。その後、平成8年度版、12年度版、14年度版、17年度版、23年度版と継続して採用されている。『新版国語2年上 教師用指導書』の「教材研究」に「2主題」として次のように記す³⁾。

食べるつもりで太らせようとしたあどけないひこよやあひる、うさぎたちに、「おにいちゃん」、「やさしいねえ」とか「親切なおにいちゃん」と言われ、お客様として神様のように育てるきつね。ある日、そんなお客様を救おうと勇敢に戦って、恥ずかしそうに笑って死んだきつね。

孤独な存在であるきつねが、初めて汚れのない純粹なものに出会い、しだいにひかれながら、それを守り抜こうと変容していく姿が、ユーモラスなタッチで描かれている。

また、4「叙述」として

・がぶりと やろうと おもったが、やせて いるので 考えた。太らせてから 食べよう (p.52)

* ここは、物語の紹介語りに当たる。きつねの狡猾な手段として表現されている。後に変容していく伏線になる。

とする。

また、2011年（平成23年）には三省堂の『小学生のこくご 2年』にも採用され、その『学習指導事例集』に、「この教材の特色」として次のように記されている⁴⁾。

孤独でずるがしこいきつねが、初めて純粹無垢なものに出会い、自分が信じられることによって、ひよこたちをお客様として神様のように大切に育て、しまいにはそれを守り抜こうと変容する物語である。

いずれも、孤独でずるがしこいきつねが、純粹無垢なひよこたちに出会い、やさしい、親切、神様みたいと信じられることによってそのように変容していく話だとしている。

さらに、『小学生のこくご 二年 学習指導書 ②』（三省堂）には

絵本には心温まるストーリーが多い。この「きつねのおきやくさま」のように、関わる相手の言葉によって、行動がよい方向へ変化していく様子は、ふだんの生活につなげたいところでもある。

とし⁵⁾、『小学生のこくご 二年 学習指導事例集』（三省堂）では、

死ぬ前のきつねの気持ちを想像し、きつねからひよこたちへ手紙の形式で書く。ひよこたちとの出会いのすばらしさや偽りの心をもっていたことへのつぐないの気持ちを想像し、書く。

とし、

その手紙の中からひよこたちへの感謝、あるいは偽りの心への謝罪などが書かれたものを何人かに紹介させ、学級全体の交流に生かす。

とも記している⁶⁾。

ここでいう「偽りの心」とは「太らせてから食べよう」と考えて「おれのうちにきなよ」と言ったことを指すのだろう。ひよこたちへの感謝、あるいは偽りの心への謝罪などを書いた児童の文章を取りあげて学級全体に発表させてそういう方向で意見をまとめていくように指示している。

このように、これまでのこの作品の教材としての扱いは、「どんな悪い子もその子を信じてあげればいい子になる」というメッセージを発するものとされてきた。はたして作者の気持ちはそのようなものだったのか、本稿ではこの作品に込められた作者の気持ちを改めて考えたいと思う。

2. 登場人物について

きつね、ひよこ、あひる、うさぎ、おおかみ、など、すべて擬人化されているので、「人物」と考えてよいが、それぞれ、そのような動物にたとえられる人物像はどのようなものか、ここでは、先入観を捨て、作者の言葉に忠実に登場人物の人間像を考えたい。

2-1 きつね

むかしむかし、あったとき。

はらぺこきつねが歩いていると、やせたひよこがやってきた。がぶりとやろうと思ったが、やせているので考えた。太らせてから食べようと。

そうとも。よくある、よくあることさ。

「やあ ひよこ。」

「やあ きつねお兄ちゃん。」

「お兄ちゃん？ やめてくれよ。」

きつねはぶるとみぶるいした。

でも、ひよこは目をまるくして言った。

「ねえ、お兄ちゃん。どこかにいいすみか、ないかなあ。こまってるんだ」

きつねは、心の中でやりとわらった。

「よしよし、おれのうちにきなよ」

すると、ひよこが言ったとき。

「きつねお兄ちゃんって、やさしいねえ。」

「やさしい？ やめてくれったら、そんなせりふ。」

でも、きつねは、うまれてはじめて「やさしい」なんて言われたので、少しぼうっとなった。

ひよこをつれてかえるとちゅう、

「おととと、おちつけおちつけ。」

切りかぶにつまずいて、ころびそうになったとき。

まず、きつねであるが、これまできつねは、「孤独でずるがしこい」と定義されてきた。しかし、作者はきつねの最も特徴的な属性を「孤独でずるがしこい」とは言っていない。たしかにきつねのうちにはきつねしかおらず、一人で暮らしているようだが、それを言うなら、ひよこもひよこ即ち幼児であるにもかかわらず住むところも親もなく一人だし、あひるとうさぎもそれぞれ一人である。取り立ててきつねだけを孤独と読むのは恣意的な読みと言わざるを得ない。作者は読者に、きつねを「はらぺこきつね」と紹介している。読者はまず、そう思って読むべきである。はらぺこであることは生き物にとって、つきつめれば死に直結するゆゆしき状態である。きつねは食べなければならなかった。作者は、きつねを初めにそう紹介しているのである。そのきつねが食べ物として最適のひよこに出合ったとき、「太らせてから食べよう」と考えた。どの指導書も、そのことを指して「ずるがしこい」「狡猾」という。しかし、作者は「ずるがしこい」などとは言っていない。「そうとも。よくある、よくあることさ。」と言っている。「はらぺこ」の生き物が、食べ物を見つけたとき、もし饑餓が極限であれば、たとえ痩せていても今すぐ食べざるを得ないが、今少し余裕があるなら太らせてから食べるのはむしろ当然、よくあることである。それを「ずるがしこい」「狡猾」というのは作者の意に反した恣意的な読みであろう。

きつねは「はらぺこ」である。そして「お兄ちゃん」と呼ばれて動揺し、「生まれてはじめて」「やさしい」なんて言われて、「少しぼうっとなった」。

最初に「お兄ちゃん」と呼びかけられたとき、きつねは動揺しながらも、「お兄ちゃん？ やめてくれよ。」と言って「ぶるとみぶるいした」。「みぶるい」は動物が、体に降りかかった雨などを振り払おうとするときの動作である。「お兄ちゃん」という呼びかけの言葉は、きつねにとって聞き慣れない言葉であり刺激的な言葉であった。きつねは彼の心に影響を与えそうな言葉の力を振り払おうとするかのようにみぶるいする。しかし、さらに重ねて「きつねお兄ちゃんって、やさしいねえ。」と言われ、「やさしい？ やめてくれったら、そんなせりふ。」と言いながら、しかし、「少しぼうっとなった」のである。彼は「おちつけおちつけ。」と自分に言い聞かせるが、それでも「つまずいて、ころびそうになった」。つまり、そうとう動揺したのである。きつねはひよこをうちに連れて帰り、「それはやさしく食べさせ」、「ひよこが『やさしいお兄ちゃん』と言うと、ぼうっとなった」。「ぼうっとなる」とは意識が正常でなくなること、冷静な判断ができなくなることである。きつねは自

2-4 おおかみ

おおかみは、どの登場人物よりも食物連鎖の上位に位置する強い者として登場する。「くろくもやまの」という形容も、不吉さや暴力的なものを連想させる。曲がりなりにも平穏であった四人を危機が襲う。おおかみは、彼らを食べにやってくる。

「こりゃ、うまそうなおいだねえ。ふんふん、ひよこに、あひるに、うさぎだな。」ひよこことあひるとうさぎはすでにおおかみに検知されてしまった。きつねはまだ検知されていないのだが、

「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ。」

とみずから名乗ってとび出した。この言葉を言ったのが、おおかみなのか、きつねなのか、と質問する読者がいたという⁷⁾。作者は

「それは、きつねです」

私は小さい声になって、こたえました。自分の書きかたがたりないのかしら？ 少々心細くなったからです。けれど気をとりにおして申し上げました。

「もし、この言葉を、おおかみがいったとしたら、きつねは逃げだしたかもしれません。自分で『いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ』となのりてたことによって、おおかみと戦う勇気がりんりんとわいたと、わたしはおもっています」

と述べている。

このような誤解を防ぐために、平成4年、教科書掲載に当たり、この言葉のあとに、作者自身の手によって「きつねはとび出した」という一文が加筆されている。さらに、平成14年からは「言うなり、きつねはとび出した。」とされ、この言葉がきつねのものであることをいっそう明瞭にしている。

3. 「きつねのおきゃくさま」主題について

この物語の主人公はきつねだとされる。たしかにひよこの言葉によって変容していくきつねは一つの生き方を示している。きつねは、ひよこから願われた自分でありたい、ひよこに思われたとおりの自分として生きたい、と思ったのである。きつねはおおかみに見つかってやむなく戦ったのではない。自ら三人の盾となって自分の命を犠牲にしたのである。きつねはひよこのかみさまとして振る舞わなければならなかったから、生き物の最も基本的な欲望である「生きたい」という願望を捨てて戦うのである。このような生き方をしたきつねはいたましい。しかし、題名が「きつねのおきゃくさま」であることから、作者の心にもっともかかっていたのはひよこなのではないだろうか。他人にここまでさせるひよこの「純粋無垢」は、非力で幼い者が生き抜くために授けられた本能的な能力である。ひよこたちは戦うきつねに加勢するでもなく、ただきつねが傷ついて死ぬのを見ているだけである。そして死んだきつねのために、悲しみのあまり食べ物ものどを通らずやせ細るということもなく、まるまる太ったままで、お墓を作り、「かみさまみたいな、そのうえゆうかなきつねのために」涙を流したのである。きつねは「やさしい」「親切」「かみさまみたい」と言われ、そのようになっていくが、ついには「ゆうかん」と言われる前にみずから「ゆうかん」にすらなってしまう。ひよこの言葉の力は本当に恐ろしい。

ひよこは幼く、純粋無垢である。純粋無垢とは、生きることの罪深さを知らないということである。そしてそのこと自体何と罪深いことだろう。ひよこは、わざとではなく、無意識にはあるが、その「何も知らない」ことによって、きつねを「ぼうっ」とさせ、「うっとり」させ、「うっとりして、きぜつしように」させ、ついには自らを犠牲にしてひよこを守らせるように彼を変容させてしまう。作者が「まるまる太った」とひよこたちをわざわざ形容するのは、彼らがきつねの死のいたましさを切実には感じていないことを示唆している。何とのんきな事よ、と読者である私は思って、そこで気がついた。のんきな「ひ

よこ」は私自身ではないか。飽食と安全の保障された今を生きている私は、それを守るために死に、神様として祀られている人々を、たとえば、八月十五日にちょっと思い出して涙したりしている。作者も「ひよこ」だったのではないか。幼く、何も知らず、「きつね」に象徴される誰彼に命がけで守られて、今を生きている。その償いがたい心の痛みに堪えているのではないだろうか。ひよこは謀略によってそうしたのではないが、しかし、ひよこのためにきつねは命を失ったのである。幼くて何も知らなかったひよこは、しかし、大人になったとき、きつねだって生きたかったはずであること、自分のためにその命を捨てさせたことに思い至るのではないだろうか。

作者はさらにある学校の先生から質問されたという⁷⁾。

「きつねがおおかみと戦ったばん、『きつねは、はずかしそうにわらってしんだ』と書かれています。どうして、きつねは、はずかしそうに笑ったのでしょうか？そして、きつねはどうしても死なないといけないのでしょうか？」

と。これに対して作者は次のように答えたという。

「このきつね、私も、生きてほしかったんです。……でも、おおかみと真正面から戦った時、きつねは力のすべてを出しつくしてしまいました。」

私は考えながらこたえました。

「はずかしそうにわらったということについてですが、……このきつねは死ぬとき、ひよこことあひるとうさぎを守ることができた喜びとともに、自分自身へのはずかしさを感じずにはいられなかったのです。

ええ、どんなに、ひよこことあひるとうさぎが、自分のことをやさしくて、親切で、神さまみたいで、その上、勇敢なきつねだと信じて涙をながしてくれて、そしてきつね自身もそのようにふるまい、しまいには本気でたたかっても、それまでの心の中のうごきから、のがれることはできません。私たちは、だれでも、自分で自分を見つめる目を閉じることはできないのですから。(中略)

それから、このきつね、私も生きてほしかった、と先にいったきつねの死について、重ねて申し上げます。

私は、できることならきつねが、ひよこやあひるやうさぎと、なかよくくらしほしかったのです。

けれど、死んでしまう、力のすべてを出しつくして死んでしまう……こんなふうに、作品に納得できないとき、私は、そのまま時間をおきます。

きつねは、生き物ならだれでもそうであるように、食べたかったし、生きたかった。そんな普通の生身の人間なのに、神さまみたいと思われて、自分でも神さまのように振る舞って、神さまみたいに死んでいった。神さまなんかじゃないのに。きつねは恥ずかしかっただろうと思う。しかしきつねは「はずかしそうに」「わらってしんだ」のである。「わらってしぬ」とは納得して死んでゆく、このように死ぬことを後悔していない、ということの意味するだろう。きつねは、ひよこから願われた自分でありたい、ひよこに思われたとおりの自分として生きたい、と思い、そのように生きて死んだのだ。そして、作者は「このきつね、私も生きてほしかった」という。ひよこのせいで死んでほしくなかった。ひよこたちを助けてなおかつ死なずに生きてほしかった。でもきつねは死ななければならなかった。作者が納得しがたい気持ちになるのはひよこが自分でも気がつかないうちに人を死に追いやってしまったことになるからだろう。

ひよこの無邪気さの罪深さは、教科書採用当初からすでに府川源一郎氏が『「きつねのおきやくさま」の曲がった読み』において次のように指摘している⁸⁾。

それにしても、なんとひよこのことばの効果の恐ろしいことか。無邪気さは大いなる罪である。それはきつねの本来の生き方を狂わせる。(中略)ひよこは、しかし再びいう。きつねが「親切」だ、と。またまたきつねは、そのことばに酔わされる。酔ったきつねは、親切を演技する。いや、もう自分が演技しているのかどうかさえわからなくなっていたにちがいない。きつねは、すでにきつねではなくなっていた。

ではなんだったのか。

きつねはひよこのいうように、「かみさま」だったのだ。神様になってしまってはもうおしまいだ。(中略)

きつねはきつねとしての死を全うすることはできない。きつねは神として死ぬのである。神ならぬ身が神として死ぬ。本物の神でないことを自覚しているきつねにとって、それは何と恥ずかしかったことだろう。きつねは「はずかしそうにわらって」死ぬしかない。(中略)

もっともこの話に書かれているのは、きつねのやさしさなどではない。もちろん、ひよこへの愛でもない。書かれているのはひよこの残酷さだ。ひよこのことばに酔払って、きつねは死んでいったのだ。

4. 終わりに：この作品を国語教科書に載せる意味

「曲がった読み」と府川氏は題するが、それは「どんな悪い子もその子を信じてあげればいい子になる」というような単純で浅い読みでないという意味であろう。そのような浅い読みだけでない、多様な読みが可能であることを示唆していることがうかがわれる。

では、小学校二年生の子どもにこの物語を読ませる意味は何なのだろうか。府川氏の言うような、ひよこの残酷さに思いを致させるのは無理かもしれない。小学二年生は、「きつね」に象徴される誰彼に命がけで守られてようやくここまで大きくなったばかりのこどもである。もう赤ちゃんではないが、しかし、自分自身がひよこであったことにはまだ自分が生きるのに精一杯のこどもでは気がつかないかもしれない。しかし、だからといって、「悪い子も信じてあげればその方向に変化していい子になる」というような読みへと子どもを誘導するのはいかがなものか。きつねは「ずるがしこい狡猾な悪い子」ではない普通の、ただ普通に生きているひとであった。まさかまるで神様みたいに他人のために死ぬなんて、自分でも思ってもみなかったことだろう。そのきつねの心情を思いやり、せめてその死をいたみ、そのような生き方もあるのだと考えてみるきっかけとしてこの教材を生かしてはどうだろうか。

5. 付言：作者について

作者であるあまんきみこは父親が南満州鉄道に勤めていた関係から旧満州・撫順（ぶじゅん）で生まれた。以下は「戦後 70 年 時を渡る船」（京都新聞【2015 年 06 月 23 日掲載】）からの引用である⁹⁾。

撫順とは、日本人にとって歴史が交錯する因縁の地だ。満鉄が経営した撫順炭鉱があり、無実の中国人農民が大量虐殺される平頂山事件の現場になった。敗戦後は京都府が編成した廟嶺（びょうれい）京都開拓団を含む日本人が撫順に避難し、難民収容所では、飢え、寒さ、病から多くの人たちが犠牲になったほか、後の残留孤児を生み出した場所でもある。

満州国時代、きみこさんは撫順から新京（現在の長春）を経て、大連へと引っ越した。「アカシア並木が印象的だった」という街では、日本語を話し、日本人の学校に通い、日本人に囲まれて暮らした。「少女時代に、満州が異国だとは思ひもしなかった」と振り返る。そんな彼女にとっての心の原風景は、2、3年おきに帰省する両親のふるさとであり、宮崎の「桃色れんげの花畑」や「黄色の菜の花畑」だった。

太陽が降り注ぐ色彩豊かな宮崎とは違い、満州の色は限りなく黒に近い灰色かもしれないという。大連神明高等女学校に進学したが、14歳の時にソ連軍が侵攻した。

瞬く間に満州国は崩壊し、“祖国”が消滅した。

47年3月、一家は大阪市に引き揚げ、2年後、母は胃がんで亡くなった。43歳だった。満州と引き揚げでの心労を一身に受けていた。

結婚して東京へと移り、国会図書館に通い、むさぼるように満州に関する本を読んだ。「知るほどにつらくなった。あまりに自分の体験と違った。本当の満州を知った時、満州について書けなくなった。いえ、生き残った私に書く資格はないと思った…」と、戒めるように語った。

どの作品にも、著者の略歴には「1931年旧満州に生まれる」と記す。

「事実ですから。消したいけど、消せない過去でしょ。満州で生まれたって、誰が自慢できますか。私の場合、戦争体験とはいっても、ソ連兵が家に入って来ないように、家中の窓に板をくぎで打ち付けたことくらい。引き揚げ船の中でも病に伏せていた。ずっと母が守ってくれたから、戦争を戦争と感じなかった。でもね。同世代の者として、ずっと負い目を感じてきた。本当に申し訳ない」

著者の略歴に、生年だけでなくあえて出生地を記すのは著者の負い目を負い続けようという意思の表れであろう。満州が異国だとは思ってもせず、苛酷な戦争と引き揚げの中を生き残りながら、戦争を戦争と感じないほど母に守られ、何も知らない幼い少女だった。作者のこのような経験は、きつねに守られ、きつねを死なせてしまったひよこに重なるように思われる。作品は、書かれてしまった後は作者から離れて読まれるべきではあるが、ひよこのために死んだきつねへの作者の痛切な思いを読み取らざるを得ない気がするのである。

引用・参考文献

- 1) あまんきみこ著：『きつねのおきやくさま』，サンリード（1984）
- 2) 木下順二，柴田武著；外山滋比古監修：『新版国語2年上』，教育出版（1992）
- 3) 教育出版編集局編：『新版国語2年上：教師用指導書』，教育出版，p.210（1992）
- 4) 『小学生の国語』編集委員会編：『小学生のこくご2年：学習指導事例集』，三省堂，p.90（2011）
- 5) 『小学生の国語』編集委員会編：『小学生のこくご二年：学習指導書②』，三省堂，p.35（2015）
- 6) 『小学生の国語』編集委員会編：「「学習指導の展開」の発問・子どもの活動・留意点」，『小学生のこくご 二年 学習指導事例集』，三省堂，pp.83-84（2011）
- 7) あまんきみこ：「二つの質問から：思い出すままに」『国語 2年下 教師用指導書』pp.108-109，教育出版，（1996）
- 8) 府川源一郎：「「きつねのおきやくさま」の曲が替った（ママ）読み」，『新版国語2年上 教師用指導書』，教育出版，pp.125-127（1992）
- 9) 京都新聞社：「戦後70年 時を渡る舟 少女が見た満州の落陽 あまんきみこさん」，http://www.kyoto-np.co.jp/info/special/postwar70/20150623_11.html（2015.12.11）